ジェイコブ・オルポナ氏　特別講義
Sacred Ambiguity: The Changing Face of Religion in Contemporary Nigeria

6 月 25 日にハーバード大学ディヴィニティ・スクール（HDS）のジェイコブ・オルポナ（Jacob Olupona）教授にご講演いただいた（学術振興会・外国人研究者招へい事業短期プログラムにて来日、受け入れ教員は筑波大学木村武史先生）。オルポナ先生はアフリカの伝統宗教と、アメリカにおけるアフリカ系移民の宗教を専門とされている。近年の主要な著作には以下のものがある（共著、共編を含む）。

- Jacob Olupona, *The City of 201 Gods: Ilé-Ifè in Time, Space, and the Imagination*, Berkely: University of California Press, 2011.（『201 の神々がいる町―時間、空間、そして想像におけるイル・イフェ―』）
- Jacob Olupona, and Regina Gemignani, *African Immigrant Religious Communities in America*, New York: NYU Press, 2007.（『アメリカにおけるアフリカ系移民の宗教的コミュニティ』）
- Jacob Olupona, *Beyond Primitivism: Indigenous Religious Traditions and Modernity*, London/New York: Routledge Press, 2004.（『プリミテイヴィズムをこえて―土着宗教伝統とモダニティ―』）

近年ナイジェリアでは、イスラームとキリスト教の対立が激化し、政治的混乱を招いている。イスラーム過激派組織「ボコ・ハラム」により女子学生 250 人以上が拉致された事件は記憶に新しい。キリスト教も、ペンテコスタリズムや福音主義の台頭により、その姿勢は硬直化している。こうした現状を踏まえ、「聖なる曖昧性―現代ナイジェリアにおける宗教情勢の変化―」と題された今回の特別講義では、近代国家の建設における宗教の歴史的、構造的なプロセスの概観と、宗教がどのようにナイジェリアの国家建設に貢献しうるかが論点となった。以下は報告者によるその要約と感想である。

オルポナ氏はナイジェリアの宗教的アクターとして３つのカテゴリーを採用している。キリスト教、イスラーム、そして諸伝統宗教だ。独立後の 1960 年代から 1970 年代にかけては、キリスト教もイスラームも、諸伝統宗教の世界観の下である程度平和に共存していた。ところが近代化が進むにつれ、諸伝統宗教は国家の発展を妨げる後進的なものとして軽視されるようになる。これは 1980 年代後半から顕著な現象であり、オルポナ氏はここを分水嶺として位置づけている。集合的アイデンティティとしての諸伝統宗教が衰退すると、急進的ペンテコスタリズムや「ボコ・ハラム」などの過激派イスラームが台頭することとなり、宗教間対立が深刻化した。

こうした集合的アイデンティティの喪失に直面して、オルポナ氏は公的領域において集合的な価値観や道徳を提供しうる宗教、すなわち「市民宗教」に期待をかけている。そして、公的領域において宗教が積極的役割を果たすためには、⑴宗教的リテラシーの涵養、⑵特定宗教による公共圏の独占の回避、および⑶平和的な宗教間対話の促進という３つの条件が必要になるとオルポナ氏は指摘した。

オルポナ氏が提案する集合的アイデンティティとしての市民宗教の必要性について、宗教学の観点からは、疑問の余地があるように思えるかもしれない。というのも、しばしば指摘されるように、宗教の公的領域への参加は、世俗主義的価値観や世俗国家の中立性と対立しかねないからだ。さらに、「市民宗教」がイデオロギー化して、信教の自由を侵害する恐れもある。

しかし、理論から離れてナイジェリアの現状に目を向けると、オルポナ氏の指摘は現実味を帯びる。ナイジェリアは世界最貧国のひとつであり、独立後も政治的腐敗と混乱に苛まれてきた。近年では、キリスト教とイスラームの「宗教間対立」の激化を 2000 年の「シャリーア事件」が象徴している。多くの罪なき市民の血が流れる一方で、特権階級による政治的腐敗は後を絶たない。集合的アイデンティティの喪失に対立の原因をみるオルポナ氏が、「市民宗教」の必要性を論じることは、こうした過酷な現実を反映している。

文責：田中浩喜

Religion on the Eve of Nigeri
Independence
The essential role that was celebrated and informed by rituals, festivals, and ceremonies
remained significant.
This was despite the noticeable impact of Christianity and Islam on indigenous
religions.
Ancestral spirituality outlined the prominence of ethnic gods and spirits because of their
links with kingdoms and lineage traditions.
Ancestral Spirituality was viewed more of culture than religion, but allowed ethnic
religious elements, such as names tied to lineage deities, to thrive.